

## 最後の遣唐使と大宰府

承和元(834)年に任命された遣唐使は、実際に唐へ渡った最後の遣唐使でした。この遣唐使では、藤原常嗣が遣唐大使、小野篁が副使に任命されました。ただ、このたびの派遣は2度も渡海に失敗して多くの人命が失われ、3度目に唐にたどり着くという困難を極めたものでした。さらに3度目の渡海にあたっては、小野篁が乗船を拒否するという事態にも陥っています。このような状況の中でも、承和の遣唐使派遣は行われました。その理由についてははまだよく分らないところもありますが、仁明天皇の代替わり、船載文物に対する需要、宗教界からの要請などが考えられています。

ところで、西鉄二日市操車場跡地の発掘調査で確認された建物遺構が、大宰府条坊内にあった「客館」跡ではないか、といわれて話題を集めたことはまだ記憶に新しいところでしょう。これに関わるか、と推測されている記録が、この承和の遣唐使の記事のなかに残されています。

承和の遣唐使船4隻は、承和3(836)年7月、博多津を出帆します。1回目の渡海です。しかし、出航後4隻とも漂流、うち第1、第4船は肥前国へ帰着してしまいます。その処置について、時の大宰



大式藤原広敏らに勅符が下されま  
す。それによると、漂流・帰着した遣唐使を「府館」に安置して再度の渡航までの間、供憶することが命じられています。

すでに述べたように、この遣唐使は三回目によく唐への渡航を果たします。承和5年のことです。その帰国に際しては、渡海した船の破損により、新羅船9隻を雇い入れて、これらに分乗しますが、この帰国もまた辛苦に満ちたものでした。最初に帰着したのは、大唐録事大神宗雄が乗っていた船でしたが、残りの船については消息がはつきりしません。そこで、ここでも時の大宰大式南洲永河に勅して、後続の船に備えさせることとし、また大神宗雄も「客館」に安置させることが命じられました。ここにみえる「府館」「客館」が、発掘された「客館」跡か、とされるものにあたるのではないかというのです。もしそうだとすれば、ちょうど承和の遣唐使が派遣された時期は、新羅人や唐商人の来航が頻繁になる時期でもあります。彼らが大宰府鴻臚館に安置・供給された可能性があることを考えると、両者の使い分けを検討してみることが必要となるでしょう。